

父親・母親の養育態度が青年期のレジリエンスに及ぼす効果

野津 友美枝

(川畑 隆ゼミ)

現代の日本社会には長期にわたる世界規模の不況や、大地震のような自然災害、凶悪な犯罪など、多くの脅威が存在し、また日常生活においても身近な人の死や学校や職場におけるいじめなど、向き合いきれない現実や出来事が数多く存在している。そのような困難な環境においては、それらに対する適応力や復元力が必要となる。

近年、困難に立ち向かう力、回復する力を表す「レジリエンス」という概念が多く取り上げられるようになった。それは、子どもから高齢者まで年齢に関係なく誰でも持つことが可能な能力であり、現在では教育現場や職場、医療現場で課題とされることが多い。

レジリエンスは子どもの頃から身につけておくべき力であると考えられるが、子どものレジリエンス形成を促進するために、子どもたちにとって一番身近である親はどのように関わっていけばよいのだろうか。

問題

レジリエンス レジリエンス (resilience) とは、もともとストレスと同様の物理学用語であり、語源はラテン語の“跳ねる (salire)”や“跳ね返す (resilire)”であり、それは“to recoil or leap back” (反動で跳ね返る、跳ね戻る) という意味だと言われている (Masten and Gewirtz, 2006)。心理学的意味では“弾力性”や“回復力”として扱われており、レジリエンスという用語をそのまま用いていることも多い。

レジリエンスに関する研究は数多く、レジリエンスの概念を初めに示した Rutter (1985) は「深刻な危険性にもかかわらず、適応的な機能を維持しようとする現象」と定義しており、その後も「逆境に直面し、それを克服し、その経験によって強化される、または変容される普遍的な人の許容力

(Grotberg, 2003)」、「ストレスフルな状況の中でも精神的健康を維持する、あるいは回復へと導く心理特性 (石毛他, 2006)」というものが提唱されている。このようにレジリエンスの定義は多岐に渡り、いまだに統一的な見解は得られていないが、総じて精神的健康を良好に保つための要因であることが明らかとなっている。そして、Masten ら (1990) がレジリエンスを「困難で脅威的な状況にもかかわらず、うまく適応する過程・能力・結果」だとしていることから、レジリエンスの概念は非常に幅広い概念であると考えられる。小塩ら (2002) は Masten らの定義にもとづいて、レジリエンスを導く概念として精神的回復力を設定した。

小花和 (2004) は、これまでのレジリエンスの研究をレビューし整理した結果、レジリエンスの構成要因を「個人内要因」と「環境要因」の2つに分類できるとした。個人内要因とは、年齢や性別、気質などの「個人要因 (I AM)」と問題解決能力などの「獲得される要因 (I CAN)」を意味し、環境要因とは、生活環境などが相互作用し発達する「周囲から提供される要因 (I HAVE)」を意味している。表1は、原ら (2013) が、小花和 (2004) を参考に、個人内要因の「I AM」と「I CAN」を1つの個人内要因として、レジリエンスに関わる要因をまとめたものである。

表1 レジリエンスに関わる要因

	要因
個人内要因	年齢・性別
	共感性
	自己効力感
	ローカス・オブ・コントロール
	自律性・自己制御
	信仰・道徳性
	好ましい気質
	コンピテンス
	問題解決能力
	ソーシャルスキル
	衝動のコントロール
	知的スキル
	根気強さ
	ユーモア
環境要因	安定した家庭環境・親子関係
	両親の夫婦間協和
	家庭内での組織化や規則
	家庭外での情緒的サポート
	安定した学校環境・学業の成功
	教育・福祉・医療保障の利用可能性 宗教的（道徳的）な組織

その後、「I AM」と「I CAN」の区別は明白ではないとするなど、さまざまな解釈がなされてきたが、レジリエンスには資質的なものと獲得的なものがあるとの想定は維持されてきている。その人が本来持っていると言われる資質的なレジリエンスは修正したり改善したりすることがむずかしいが、生活環境や人間関係から身につけられるとされる獲得的なレジリエンスは、学習によって高められるという研究もみられる。平野(2010)は、レジリエンスを導く多様な要因のなかには後天的に身につけやすいものと、そうでないものがあると考え、それらを資質的・獲得的な要因に分けて捉えるために、Cloningerの気質-性格理論(TCI)を用いて二次的レジリエンス要因尺度を作成した。その結果、資質的レジリエンス要因として「楽観性」「統制力」「社交性」「行動力」の4因子、獲得的レジリエンス要因として「問題解決志向」「自己理解」「他者心理の理解」の3因子の計7因子が抽出され、その後それらの妥当性も証明された。資質的レジリエンスの「楽観性」は、

「将来に対して不安をもたず、肯定的な期待をもって行動できる力」であり、「統制力」は「もともと不安が少なく、ネガティブな感情や生理的な体調に振り回されずにコントロールできる力」、「社交性」は「もともと見知らぬ他者に対する不安や恐怖が少なく、他者との関わりを好み、コミュニケーションを取れる力」、そして「行動力」は「目標や意欲を、もともとの忍耐力によって努力して実行できる力」とした。獲得的レジリエンスの「問題解決志向」は「状況を改善するために、問題を積極的に解決しようとする意志をもち、解決方法を学ぼうとする力」であり、「自己理解」は「自分の考えや、自分自身について理解・把握し、自分の特性に合った目標設定や行動ができる力」、「他者心理の理解」は「他者の心理を認知的に理解、もしくは受容する力」であるとした。さらに平野(2012)は、レジリエンスの生得的な側面は容易に変えることがむずかしく、また生得的なリスクを多く持つ者は、同時にレジリエンス要因が少ないことが推測されるとした。そのため、単にレジリエンス要因を身につけさせるような介入をするのではなく、まずレジリエンスの生得的な要因とそうでない要因とを明らかにし、さらに個々で異なる介入の方向性を検討していくことが望まれるという。レジリエンスの促進に外的資源である学校や家庭が及ぼす影響も大きいとされており、近年ではレジリエンス教育という予防的な観点からレジリエンスを捉えようとする動きもある(原ら,2013)。

親の養育態度 親と子の関係を取り扱う研究のなかでも、とくに重要な基礎となる有名な理論に、精神分析学者であるBowlby(1958)のアタッチメント(愛着)理論がある。彼がこの「愛着」という概念を提唱して以来、これまで多方面から親子関係に関する研究が進められてきた。「愛着」は特定の親密な養育者との間に結びつけられる深い絆であり、子どもの安定した情緒の発達を促し、その後の対人関係にも影響を及ぼす重要な要因であることがわかっている。愛着の発達要因としては、子どもの気質や潜在性などの「生得的な要因」と、子どもを取り巻く「環境的な要因」があるといわれており、その「環境的な要因」のうち親子関係、とくに母親の存在は子どもの愛着形成に大

父親・母親の養育態度が青年期のレジリエンスに及ぼす効果

きな影響力があるといわれる。

米山(1999)は、大学生を対象に、親の養育態度についての認知と友人関係および依存心との関係を研究している。その結果、現代的友人関係において防衛的とされる友人との関係は、両親からの影響があるとされた。山口(2008)は、大学生が回想した両親の養育態度の認知が、一般的な愛着表象と関係特異的な愛着表象に与える影響について研究を行なった。その結果、両親の養育態度についての認知と、一般的な対人関係にまつわる不安との関連は小さかったにもかかわらず、特異的な他者(恋人や友人)との関係が、その人の対人関係の不安とより関連しているということがわかった。つまり、両親の養育態度は後の恋人や友人との関係構築に影響があるということである。さらに小林(2011)は、父親の養育態度、母親の養育態度、両親の養育態度を含んだ3つのモデルを比較した結果、青年期の友人関係のありかたは、母親の養育態度を用いたモデルを経由していることを示した。つまり、父親でなく、母親の養育態度がその子どもの青年期の友人関係を形成しているということである。このようにさまざまな研究において、幼少期の子どもと親との関係性が、後の友人関係や上司との関係、パートナーとの関係にまで幅広く影響を及ぼしていることが示されている。

ほかにも、両親の養育態度と子どもの人格形成との関連についての研究は数多く存在する。古川ら(2004)は、大学生を対象に、親の養育態度、家族の雰囲気と大学生の境界例心性(社会的・文化的に逸脱しない範囲であるものの、対人関係・自己像・感情の不安定、および空虚感・著しい衝動性などの人格的特徴)との関連について研究を行なった。その結果、親の情緒的で受容的な態度は境界例心性を軽減する傾向が見られ、さらに家族の冷淡で厳格な雰囲気と境界例心性は境界例心性の特徴を高めることが示唆された。また、菅原(2006)は、大学生を対象として、児童期の母親の養育態度と子どもの自尊感情との関連を研究した。その結果、養育態度の「過保護-期待」型と自尊感情との高い関連が見られた。そのことから、過度の子どもへの期待や干渉、溺愛などは本来望ましくない養育態度であるが、他方で子どもの要

求や発言に重きをおき尊重するという行動も含まれるため、子どもが自分自身を肯定的に感じる 경우가多く、それが自尊感情を高めるとした。後の高富ら(2011)の研究からは、親自身が認識する養育態度のなかでも親の「自信」が大学生の心理的自立を促し、また子どもが認知する親の養育態度のなかでも「受容」と「自立促進」が大学生の心理的自立を促進することも明らかにされている。さらに子どもの認知する親の養育態度そのものが、子どもの自立意識をより高めていることも示されている。以上のように、親の養育態度は、子どもの自尊感情や自立心など、さまざまな人格の形成と関連している。

親子関係研究において、母子関係を扱った研究に比べて、父親の養育態度に焦点を当てたものは圧倒的に少ない。比較研究においては、父親よりも母親の方が子どもの発達に大きく影響を及ぼしていることが明らかとなっている。しかし、たとえば、父親の不在が子どもの問題行動を高い確率で生起させることや、さらに父親の養育態度が子どもの情緒面や社会性などの多くの側面に影響を及ぼすという研究結果もみられる。近年、主夫や共働き家庭が増えているように、時代の変化とともに親子の関係にもさまざまな変化がみられるが、母親だけでなく父親の養育態度も子どもの発達に何らかの影響を及ぼしているに違いない。

親の養育態度とレジリエンスの関係 現在、親の養育態度そのものとレジリエンスの関連についての研究はあまりみられないが、浅賀ら(2006)は、レジリエンスの「問題解決意欲」、「対人的あたたかさ」、「楽観的自己受容」という3つの下位尺度、17項目からなる大学生用レジリエンス尺度を作成し、養育態度との関連を検討した。その結果、男女ともににおいて母親が日常的に関わろうとすることがレジリエンスの特性を高める可能性を示唆している。また則定(2007)は、中学生を対象に重要な他者である父親、母親さらに友人に対する心理的居場所感とレジリエンスとの関連についての研究を行ない、性差に関係なく、母親に対する心理的居場所感が親友に対する心理的居場所感を高め、さらに親友に対する心理的居場所感はレジリエンスを高めることを示した。しかし、父親に対する心理的居場所感とレジリエンスとの直接的

な関係は見られなかった。また則定は大学生を対象に同様の研究を実施した。その結果、男子の場合、父親と親友に対する心理的居場所感が自己受容とレジリエンスを高めていることが示され、女子の場合は母親と親友に対する心理的居場所感が自己受容とレジリエンスを高めていることが示された。これらの研究から、親の養育態度が子どものレジリエンスに何らかの影響を与えている可能性があると考えられ、男子はとくに父親の養育態度が、女子はとくに母親の養育態度が、レジリエンスの形成に効果的であると考えられる。

目的

Erikson は人生を 8 つの発達段階に分け、それぞれの段階には発達課題があるとしている。そのなかの 1 つとしてあげられる青年期の発達課題に自我同一性の確立があり、Erikson の発達段階のなかでもよく取り上げられる重要な課題である。青年期は、「自分とは何か」「自分の生きている意味は何か」「自分は将来どこへいくのか」など、過去、現在、そして未来の時間の流れのなかでこれまでの自分のあり方や価値観を改めて振り返り、やがて自分自身の解決に達していく、いわば「自分探し」の時期であるといえる。しかしながらこの時期の課題は簡単に終わるものではなく、その作業過程ではさまざまな心理的な悩みや危機を経験する。また青年期は親からの「心理的離乳」の時期である。心理的離乳はアメリカの心理学者である Hollingworth が提唱した概念で、両親と積み重ねてきた価値観とはまた違った価値観や信念、理想を確立していこうと努力し、親から精神的に自立することである。そして青年期には生理的・身体的成熟も伴うため、さらに不安を掻き立てられ、親や大人社会の価値観に敏感になり、反抗的な態度をとる。そのことにより親との心理的葛藤や分離不安により悩むことが多くある。青年期はそうしたさまざまなストレスを上手に受け止め、乗り越えなければならぬ大変な時期である。そこでそのストレスの影響に対して、防御・緩衝する、あるいは回復をもたらす力だと考えられているのが精神回復力と呼ばれる「レジリエンス」である。

本研究では、井上ら(2006)によって作成された「情愛」「依存期待」「決定尊重」の 3 下位尺度からなる親の養育態度尺度である「Parental Bonding Instrument(PBI)と、平野(2010)によって作成された「資質的レジリエンス」「獲得的レジリエンス」の 2 下位尺度からなる「二次元レジリエンス要因尺度」を用いて、子どもが認知する父親または母親それぞれの養育態度が、精神的回復の効果を持つとされるレジリエンスの促進にどのような効果をもたらしているのかを検討することを目的とした。

仮説

- 仮説 1 性差に関係なく、母親の「情愛」または「決定尊重」が、子どものレジリエンスを高める。
- 仮説 2 男子において、父親の「情愛」または「決定尊重」が、子どものレジリエンスを高める。

方法

調査時期 2014 年 10 月～11 月に実施した。

調査対象者 京都府内にある大学の 1～4 年生 153 名(男性 92 名、女性 61 名、平均年齢 20.25 歳)に対して調査を行い、回答に不備のあるものを除いた 136 名(男性 83 名、女性 53 名、平均年齢 20.28 歳)を分析対象とした。

実施方法 講義時間を利用して受講者に質問紙を配布し、個別に答えてもらったあと、回収した。なお、質問紙の配布時に本研究の趣旨や方法を説明し、被験者の同意を得たうえで実施した。

質問紙の構成

(1) フェイスシート

回答者の性別、年齢についての記入欄を設けた。

(2) 親の養育態度の測定

Parental Bonding Instrument(PBI)(井上ら, 2006): 全 22 項目からなる 3 因子によって構成されている。第 1 因子は「いつも温かくて親しみのある声で話しかけてくれた」「私に絶えず微笑みかけてくれた」などの「情愛」9 項目、第 2 因子は「私のことを父(または母)がいなければ自分のことも処理できない

と思っていた」「私を、つとめて父（または母）に依存させようとしていた」など「依存期待」7項目、第3因子は「私の望みのままに自由にさせてくれた」「私が望めば、いつも外出させてくれた」などの「決定尊重」6項目である。回答方法は、井上ら(2006)と同様に「全くあてはまらない(1)」～「非常によくあてはまる(6)」の6件法(逆転項目については「全くあてはまらない(6)」～「非常によくあてはまる(1)」とする)で求めた。また「中学生だった頃」を想起しながら父親または母親の養育態度を記入するように求めた。

(3) レジリエンスの測定

二次元レジリエンス要因尺度(平野, 2010): 個人のレジリエンス要因を、持って生まれた気質と関連の強い「資質的レジリエンス要因」と、後天的に身につけていきやすい「獲得的レジリエンス要因」に分けている。「資質的レジリエンス要因」は「将来に対して不安をもたず、肯定的な期待をもって行動できる力」である「楽観性」, 「もともと不安が少なく、ネガティブな感情や生理的な体調に振り回されずにコントロールできる力」である「統制力」, 「もともと見知らぬ他者に対する不安や恐怖が少なく、他者との関わりを好み、コミュニケーションを取れる力」である「社交性」, 「目標や意欲を、もともとの忍耐力によって努力して実行できる力」である「行動力」の4要因からそれぞれ3項目、計12項目で構成されている。「獲得的レジリエンス要因」は「状況を改善するためにも問題を積極的に解決しようとする意志をもち、解決方法を学ぼうとする力」である「問題解決志向」, 「自分の考えや、自分自身について理解・把握し、自分の特性に合った目標設定や行動ができる力」である「自己理解」, 「他者の心理を認知的に理解、もしくは受容する力」である「他者心理の理解」の3要因からそれぞれ3項目、計9項目で構成されている。回答方法は平野(2010)と同様に「全くあてはまらない(1)」～「よくあてはまる(5)」の5段階評定(逆転項目については「全くあてはまらない(5)」～「よくあてはまる(1)」とする)で求めた。

結果

信頼性分析 親の養育態度尺度(PBI)と二次元レジリエンス要因尺度の各項目に関して、Cronbachの α 係数を用いて信頼性分析を行なった。

親の養育態度尺度は、父親または母親それぞれの3下位尺度である「情愛」9項目、「依存期待」7項目、「決定尊重」6項目について信頼性分析を行なった。まず父親の「情愛」の α 係数は.781、「依存期待」の α 係数は.738、「決定尊重」の α 係数は.737であったため、十分な3下位尺度の内的一貫性が認められた。また、母親の「情愛」の α 係数は.909、「依存期待」の α 係数は.813、「決定尊重」の α 係数は.811であったため、3下位尺度の内的一貫性が確認できた。

二次的レジリエンス要因尺度は2下位尺度である「資質的レジリエンス」12項目、「獲得的レジリエンス」9項目について信頼性分析を行なった。「資質的レジリエンス」の α 係数は.818、「獲得的レジリエンス」の α 係数は.707であった。したがって2下位尺度それぞれの内的一貫性が十分であることが確認された。

相関分析 PBI(父親および母親)と二次的レジリエンスの関係を見るために、相関分析を行なった。

まず「資質的レジリエンス」と父親の「情愛」の間には、有意な低い正の相関が認められ($r=.281, p<.01$)、「依存期待」の間には、有意な低い負の相関が認められたが($r=-.222, p<.01$)、「決定尊重」の間には有意な相関が認められなかった($r=.140, ns$)(表2)。「獲得的レジリエンス」と父親の「情愛」の間には、有意な低い正の相関が認められ($r=.202, p<.01$)、「依存期待」の間には、有意な低い負の相関が認められたが($r=-.298, p<.01$)、「決定尊重」の間には、有意な相関が認められなかった($r=.157, ns$)(表3)。

また「資質的レジリエンス」と母親の「情愛」の間には、有意な低い正の相関が認められ($r=.371, p<.01$)、「決定尊重」の間には、有意な低い正の相関が認められたが($r=.243, p<.01$)、「依存期待」の間には有意な相関が認められなかった($r=-.183, ns$)(表4)。「獲得的レジリエンス」と

母親の「愛情」の間には、有意な低い正の相関が認められたものの($r=.288, p<.01$), 「依存期待」の間には有意な相関は認められず($r=-.010, ns$), 「決定尊重」の間にも有意な相関は認められなかった($r=.092, ns$)(表5)。

表2 PBIの下位尺度得点と資質的レジリエンスの相関係数(父親)

	資質的レジリエンス	情愛	依存期待	決定尊重
資質的レジリエンス	1	.281**	-.222**	.140
情愛	.281**	1	-.106	.372**
依存期待	-.222**	-.106	1	-.387**
決定尊重	.140	.372**	-.387**	1

N=100 ** $p<.01$

表3 PBIの下位尺度得点と獲得的レジリエンスの相関係数(父親)

	獲得的レジリエンス	情愛	依存期待	決定尊重
獲得的レジリエンス	1	.202**	-.298**	.157
情愛	.202**	1	-.106	.372**
依存期待	-.298**	-.106	1	-.387**
決定尊重	.157	.372**	-.387**	1

N=100 ** $p<.01$

表4 PBIの下位尺度得点と資質的レジリエンスの相関係数(母親)

	資質的レジリエンス	情愛	依存期待	決定尊重
資質的レジリエンス	1	.371**	-.183	.243**
情愛	.371**	1	-.208**	.501**
依存期待	-.183	-.208**	1	-.352**
決定尊重	.243**	.501**	-.352**	1

N=100 ** $p<.01$

表5 PBIの下位尺度得点と獲得的レジリエンスの相関係数(母親)

	獲得的レジリエンス	情愛	依存期待	決定尊重
獲得的レジリエンス	1	.288**	-.010	.092
情愛	.288**	1	-.208**	.501**
依存期待	-.010	-.208**	1	-.352**
決定尊重	.092*	.501**	-.352**	1

N=100 ** $p<.01$

重回帰分析 父親または母親それぞれの養育態度がレジリエンスにどのような影響を与えているのかを明かにするために重回帰分析を行なった。「情愛」、「依存期待」、「決定尊重」の3下位尺度で構成される親の養育態度を独立変数とし、「資質的レジリエンス」と「獲得的レジリエンス」の2下位尺度で構成されるレジリエンスを従属変数とした。

まず「資質的レジリエンス」については、父親の「情愛」が有意な弱い正の影響($\beta =.275, p<.05$)を、「依存期待」が有意な弱い負の影響($\beta =-.209, p<.05$)を与えていたが、父親の「決定尊重」からの影響を確認することはできなかった($\beta =-.044, ns$)。また、母親の「情愛」が有意な弱い正の影響($\beta =.329, p<.05$)を与えていたものの、母親の「依存期待」からの影響がみられなかった($\beta =-.099, ns$)。「決定尊重」からもまた影響を確認することはできなかった($\beta =.044, ns$)。

また「獲得的レジリエンス」については、父親の「情愛」が有意な弱い正の影響($\beta =.179, p<.05$)を、「依存期待」が有意な弱い負の影響($\beta =-.286, p<.05$)を与えていたが、父親の「決定尊重」からの影響を確認することはできなかった($\beta =-.020, ns$)。また母親の「情愛」が有意な弱い正の影響($\beta =.325, p<.05$)を与えていたものの、母親の「依存期待」からの影響はみられなかった($\beta =.037, ns$)。「決定尊重」からもまた影響を確認することはできなかった($\beta =-.058, ns$)。

さらに、父親または母親の養育態度とレジリエンスの関連に性差があるかについて分析した。

父親・母親の養育態度が青年期のレジリエンスに及ぼす効果

その結果、「資質的レジリエンス」について、女子は父親の「情愛」が有意な弱い正の影響 ($\beta = .300, p < .05$) を、また母親の「情愛」が有意な弱い正の影響 ($\beta = .355, p < .05$) を与えており、さらに母親の「依存期待」が有意な弱い負の影響 ($\beta = -.328, p < .05$) を与えていた (図 1)。また男子は父親の「情愛」が有意な弱い正の影響 ($\beta = .265, p < .05$) を、また母親の「情愛」が有意な弱い正の影響 ($\beta = .320, p < .05$) を与えていた。

また「獲得的レジリエンス」について、女子は父親の「情愛」が有意な弱い正の影響 ($\beta = .325, p < .05$) を、男子は母親の「情愛」が有意な弱い正の影響 ($\beta = .373, p < .05$) を与えていた。さらに男子は父親の「依存期待」が有意な弱い負の影響 ($\beta = -.269, p < .05$) を与えていた。

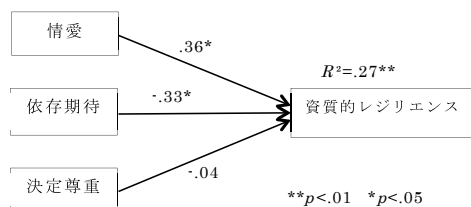


図 1 母親の PBI 下位尺度と資質的レジリエンスの重回帰分析結果 (女子)

考察

母親の養育態度と資質的レジリエンスとの関連

「資質的レジリエンス」については、母親の「情愛」が有意な弱い正の影響 ($\beta = .329, p < .05$) を与えていた。さらに、性差はみられず、男女とも母親からの「情愛」が「資質的レジリエンス」に正の影響を与えていることがわかった。しかし、母親の「決定尊重」と「資質的レジリエンス」との関連が、男女ともみられなかった。したがって、仮説 1 の一部が支持された。その理由として、男女とも母親の受容的で肯定的なあたたかな態度が、子どもに肯定的な考えや自信を与えているからではないかということが考えられる。浅賀ら (2006) でも述べられているように、母親が子どもに日常的に関わりようとする積極的な姿勢が、子どものレジ

リエンスの特性を高めたのではないだろうか。また、今回は母親の「決定尊重」の態度との関連が示されなかったが、それは子ども自身が母親のその態度をどのような意味で受け取っているかによって、受ける影響が異なるためだと考えられる。子どもに自由に決定を任せるような放任的ともとれる親の態度は、それを子どもが自主尊重と受け取るか、逆に自分は愛されていない、関心をもたれていないと感じとるかによって受け取り方は異なる。したがって「決定尊重」の態度は、両極端な影響をレジリエンスに与えている可能性がある。さらに、母親の養育態度のなかでも「依存期待」が「資質的レジリエンス」に何らかの負の影響を女子のみに及ぼしているという、仮説には取り上げなかった結果が得られた。母親の決めつけや依存的な態度が、とくに女子の積極的な行動力や統御力、社交性などを低めていることが考えられる。親の養育態度の研究 (菅原ら, 2002) に、あたたかさを欠いた親の養育態度や過干渉傾向が子どものうつ病の危険因子とされると述べられているように、母親の過度な愛情や依存が女子のみの「資質的レジリエンス」に負の影響を及ぼしたのではないだろうか。

母親の養育態度と獲得的レジリエンスとの関連

「獲得的レジリエンス」に対して、母親の「情愛」が有意な弱い正の影響 ($\beta = .325, p < .05$) を与えていた。また性差を分析したところ、男子にのみ有意な弱い正の影響がみられた。男子の場合、母親からの受容的で肯定的な養育態度によって、子どもが自分の気持ちや考えを把握したうでのストレスフルな状況の改善策や、他者の心理の理解も深めての解決策を想起し、立ち直る回復力を高めていると考えられる。しかし、女子には母親の「情愛」の態度との関連がなかったので、「獲得的レジリエンス」に関しては仮説 1 が支持されなかった。また「決定尊重」と「獲得的レジリエンス」との間に関連が示されなかったが、「資質的レジリエンス」との間にも関連がみられなかった理由と同様に、母親の放任的な態度を子ども自身がどう受け止めたかによって受ける影響が異なるためであると考えられる。

父親の養育態度と資質的レジリエンスとの関連

「資質的レジリエンス」に対しては父親の「情愛」

が有意な弱い正の影響 ($\beta = .275, p < .05$) を、「依存期待」が有意な弱い負の影響 ($\beta = -.209, p < .05$) を与えていることがわかった。性差をみると、男子は父親の「情愛」の養育態度が「資質的レジリエンス」に有意な弱い正の影響を与えていた。しかし、「決定尊重」と「獲得的レジリエンス」との間には関連がみられなかった。したがって仮説2の一部が支持された。さらに、女子についても同様な結果が得られたため、男女関係なく、母親と同様に父親の「情愛」は「資質的レジリエンス」を高めていることが示された。父親の受容的で肯定的な態度が、子どもの性にかかわらず肯定的な考えや自信を持たせていると考えられる。父親の養育態度に関する研究(森下, 2001)で、父親の愛情豊かで統制がゆるやかな養育態度が女子の自己抑制(欲求に耐える力, 根気強さ)の発達を高めることが示されており、今回のこのような結果にも関連するのではないかと思われる。また、仮説としては取り上げなかったが、父親の「依存期待」が「資質的レジリエンス」に何らかの負の影響を及ぼしていた。あたたかさを欠いた親の養育態度や過干渉傾向が子どものうつ病の危険因子とされる報告もある(菅原ら, 2002)が、父親の決めつけや依存的な態度は子どもの統御力や行動力などに影響を与え、回復力を低めることが示唆される。父親の過度な愛情や依存が男女関係なく「資質的レジリエンス」に負の影響を及ぼしたのではないだろうか。

父親の養育態度と獲得的レジリエンスとの関連

「獲得的レジリエンス」に対しては父親の「情愛」が有意な弱い正の影響 ($\beta = .179, p < .05$) を、「依存期待」が有意な弱い負の影響 ($\beta = -.286, p < .05$) を与えていることがわかった。性差についてみると、女子のみに父親からの「情愛」が「獲得的レジリエンス」を高める効果が認められた。これは仮説にはあげていなかったことである。女子の場合、母親からの受容的で肯定的な養育態度によって、子どもが自分の気持ちや考えを把握したうえでのストレスフルな状況の改善策や、他者の心理の理解も深めての解決策を想起し、立ち直る回復力を高めていると考えられる。また、父親の「依存期待」が「獲得的レジリエンス」に何らかの負の影響を及ぼしていることも明らかとなり、性差

を検討したところ、とくに男子にその傾向がみられることがわかった。父親の決めつけや依存的な態度が、とくに男子の問題を積極的に解決しようとする力や周囲との協調性を低めているのではないかと考えられる。あたたかさを欠いた親の養育態度や過干渉傾向が子どものうつ病の危険因子とされる報告(菅原ら, 2002)から考えると、「獲得的レジリエンス」へも負の影響を及ぼしている可能性があると考ええる。

総合的考察 以上のことから、父親母親ともに「情愛」の養育態度が子どものレジリエンスを高めるのに効果があることが明らかとなった。とくに変えることがむずかしいとされる「資質的レジリエンス」は、父親または母親の「情愛」の態度によって高められると考えられる。つまり、子どもに対する両親の受容的で肯定的なあたたかな姿勢が、子どもがストレスで傷つきやすい場合においてもその状況をポジティブに捉えたり、新たな目標に向けて気持ちを切り替えたり、さらに上手に周囲のサポートを得られたりという精神的な回復力を高めるのではないだろうか。また、学習によって獲得できるものと推測される「獲得的レジリエンス」については、女子の場合は父親の「情愛」が、男子の場合は母親の「情愛」がそれを高めることがわかった。このことから、異性の親の受容的で肯定的なあたたかな態度によって、子どもは自分の気持ちや理解について把握する力や、他者の気持ちに対する肯定的な理解と受け止める力を高め、さらに問題の解決につなげて立ち直っていく力を高める可能性があるといえる。また、親の「決定尊重」とレジリエンスの関連は認められなかった。これは親の子どもに決定を任せたり自由に行動させたりという放任的ともいえる態度が、子どもにとって自主尊重として肯定的に受け止められるのか、反対に自分は愛されていないというように否定的に受け止められるかによって、受ける影響が異なることがその理由として考えられる。否定的に受け止められないように親がどう関わっていたかではなく、子どもにどう受け止められたかを親が考えることの重要性が問われるのではないだろうか。さらに本研究では、母親の「依存期待」が女子の「資質的レジリエンス」に負の影響を与え、父親の「依存期待」が男子の「獲得的レジリ

父親・母親の養育態度が青年期のレジリエンスに及ぼす効果

エンス」に負の影響を与えていることも明らかになった。このことから、同性の「依存期待」によってレジリエンス要因を低める可能性が示唆されたといえる。子どもに対する過度の依存や干渉傾向のある養育態度が、子どもの精神的健康に危険因子を与える可能性を示唆するものである。

今後の課題 本研究では、父親および母親それぞれの養育態度がレジリエンスにどのような影響を及ぼしているのかについて検討した。その結果、父親および母親の養育態度が、男女ともにレジリエンスに大きく影響を与えていることが明らかとなった。また、母子間だけでなく父子間の関係性もレジリエンスに大きな影響を及ぼしていたことや、養育態度の下位尺度である「決定尊重」とレジリエンスとの関連がみられなかったこと、同性の親と異性の親によって子どもの高められるレジリエンスが異なるなどの結果がみられたが、さらに深く検討する必要がある。

近年のめまぐるしい社会の変化のなかで、逆境を乗り越える力、倒れても起き上がれる柔軟性や回復力が必要になり、レジリエンスという概念はさらに注目されていくだろうと思われる。しかし、多くの論文や書籍で語られるレジリエンスの概念や定義自体、未だ定まっていない。

また、親の養育態度とレジリエンスとの関連においては、「獲得的レジリエンス」以上に「資質的レジリエンス」のほうが、男女とも同じように父親と母親の養育態度から大きく影響を受けている傾向がみられた。レジリエンスについては後天的に獲得できる「獲得的レジリエンス」のほうに注目がなされがちだが、人間のレジリエンス要因には遺伝的・生物学的な影響の強いものがある可能性がうかがわれた。「資質的レジリエンス」要因は容易には変更できにくいと考えられるが、今後は両親のレジリエンスも絡めて検討し、遺伝的・生物学的な関連を明らかにするべきだろう。さらに、家庭内だけでなく、学校や職場においてもレジリエンスを維持、促進する要因があるかどうかについても検討が必要である。

謝辞

本論文の作成にあたり、ご指導頂きました京都

学園大学人間文化学部心理学科川畑隆教授、行廣隆次准教授、赤間健一講師、ならびに調査実施にご協力いただいた研究協力者の皆様、その他の京都学園大学の先生方に深く感謝を申し上げます。

参考文献

- 庄司順一 2009 リジリエンスについて 人間福祉学研究 2(1),35-47
- 羽賀祥太・石津憲一郎 2014 個人的要因と環境的要因がレジリエンスに与える影響 教育実践研究：富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要 8,7-12
- 齊藤和貴・岡安孝弘 2009 最近のレジリエンス研究の動向と課題 明治大学心理社会学研究 4,72-84
- 石毛みどり・無藤隆 2006 中学生のレジリエンスとパーソナリティとの関連 パーソナリティ研究 14(3),266-280
- 齊藤和貴・岡安孝弘 2011 大学生のレジリエンスがストレス課程と自尊感情に及ぼす影響 The Japanese Journal of Health Psychology 24(2),33-41
- 平野真理 2010 レジリエンスの資質的要因・獲得的要因の分類の試み—二次元レジリエンス要因尺度(BRS)の作成 パーソナリティ研究 19(2),94-106
- 原郁水・都築繁幸 2013 保険教育への応用を目指したレジリエンス育成プログラムに関する文献的考察 教科開発学論集 1,225-236
- 小花和 Wright 尚子 2004 幼児期のレジリエンス ナカニシヤ出版
- 平野真理 2012 二次元レジリエンス要因の安定性およびライフイベントとの関係 パーソナリティ研究 21(1),94-97
- 平野真理 2013 生得性・後天性の観点からみたレジリエンスの展望 東京大学大学院教育学研究科紀要 52,411-417
- 米山貴志 1999 親の養育態度の認知と青年期の友人関係および依存心との関係 日本教育心理学会総会発表論文集 41,677
- 古川奈美子・北山修 2004 大学生における境界例心性と親の養育態度・家族の雰囲気との関係

- 性について 九州大学心理学研究 5,207-218
- 菅原正和・伊藤由衣 2006 児童期の母子関係が青年期の自我形成に及ぼす影響—自尊感情 (Self Esteem) と対人不安を中心として 岩手大学教育学部研究年報 65,31-44
- 山口正寛 2008 回想された両親の養育スタイル認知が青年期の愛着表象に与える影響 神戸大学大学院人間発達環境学研究紀要 1(2),1-9
- 小林真 2011 中学校時代の両親の養育態度が青年期の友人関係のあり方に及ぼす影響—自己概念を媒介変数として とやま発達福祉学年報 2,21-28
- 高富莉那・桂田恵美子 2011 大学生の心理的自立と親の養育態度との関連 臨床教育心理学研究 37,27-32
- 浅賀万里江・岩立志津夫・松野隆則 2006 大学生のレジリエンスと親の養育態度の関連について 日本教育心理学会総会発表論文集 48,23
- 則定百合子・齊藤誠一 2007 青年期の心理的居場所感がレジリエンスに及ぼす影響 日本青年心理学会大会発表論文集 15,80-81
- 井上俊哉・大井京子・西村純一・井森澄江・斉藤こずゑ 2006 親子関係の生涯発達心理学的研究Ⅱ—PBI と IPA の尺度の再検討 東京家政大学研究紀要 46,245-251
- 菅原ますみ・八木下暁子・訖摩紀子・小泉智恵・瀬地山葉矢・菅原健介・北村俊足 2002 夫婦関係と児童期の子どもの抑うつ傾向との関連—家族機能および両親の養育態度を媒介として 教育心理学研究 50,129-140
- 森下正康 2001 幼児期の自己制機能の発達 (3) —父親と母親の養育パターンが幼児にどのような影響を与えるか—和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要 11,87-100